



ひょうご人権ジャーナル

KIZUNA

きずな

特集 男女共同参画

ともに輝く 社会をめざして

INDEX

- 2 グラフで見る女性の人権
- 3 一人の女性として、母親として輝き続けたい
小林 祐梨子さん(元陸上選手)
- 4 “卒業”したい、女性への依存を前提にした男女平等社会
—世代を超えた参画理念の共有を—
鹿嶋 敬さん(一般財団法人女性労働協会 会長)
- 5 女性の人権を守る～DV防止に向けて～
高橋 啓子さん(聖泉大学人間学部 教授)
- 6 ママの働き方進化論
NPO法人ママの働き方応援隊(神戸市)
- 7 生きることのもうひとつの意味
ドリアン助川さん(作家・歌手)
- 8 情報ふらざ

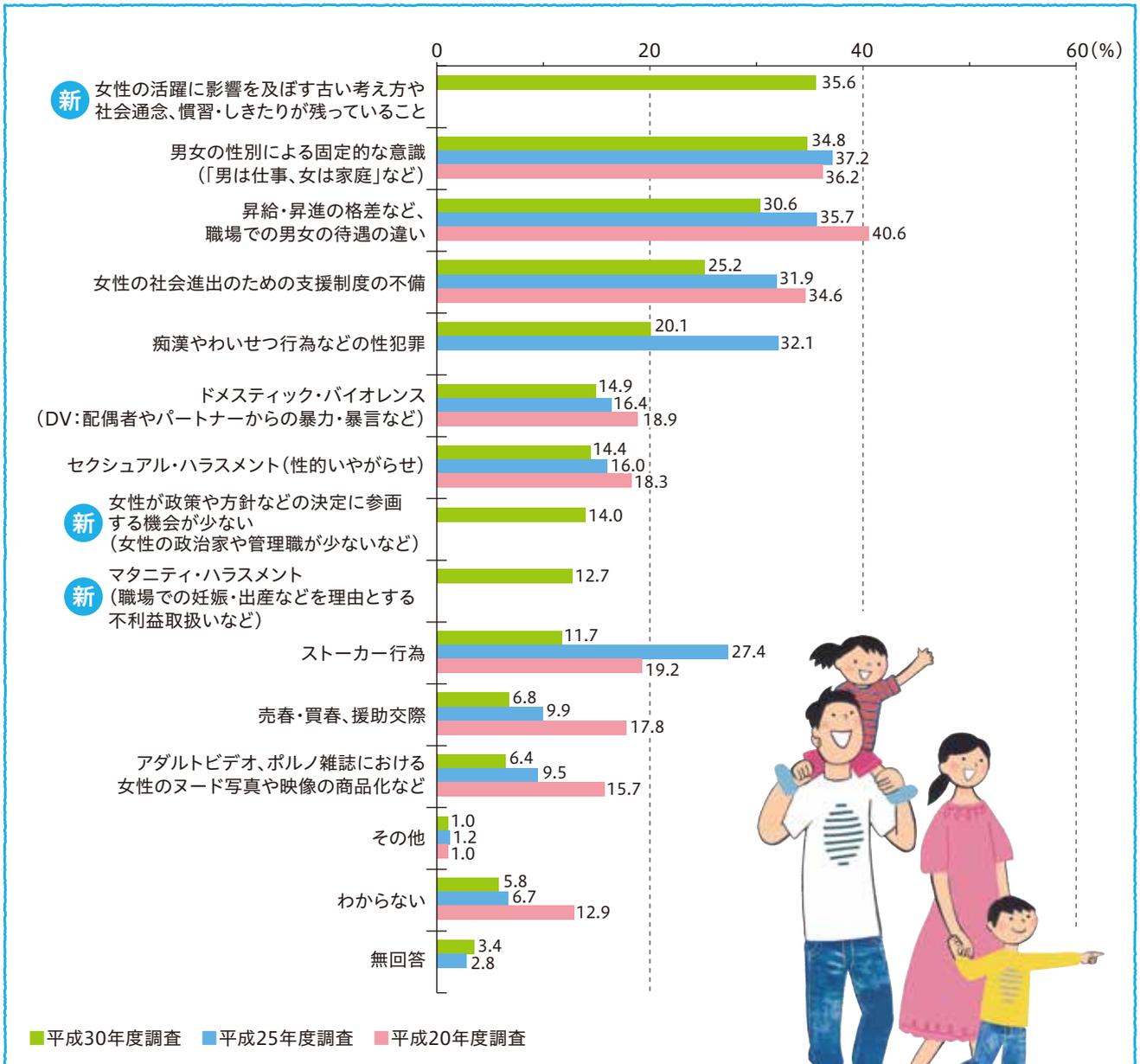


グラフで見る女性の人権

平成30年度 人権に関する県民意識調査の結果より

女性に関することで、人権上、特に問題があると思うこと

(○は3つまで)



兵庫県が昨年度実施した人権に関する県民意識調査の結果を見ると、女性に関することで県民の皆さんが特に問題があると思うことは、「女性の活躍に影響を及ぼす古い考え方や社会通念、慣習・しきたりが残っていること」が35.6%で最も高く、次いで「男女の性別による固定的な意識(「男は仕事、女は家庭」など)」(34.8%)、「昇給・昇進の格差など、職場での男女の待遇の違い」(30.6%)、「女性の社会進出のための支援制度の不備」(25.2%)になっています。

この人に
聞く!

一人の女性として、 母親として輝き続けたい

元陸上選手

こばやし ゆりこ
小林 祐梨子 さん

現役時代から明るい笑顔がトレードマークの小林さん。結婚、出産を経て母親となった今も、陸上のみならずさまざまな分野で活躍中の小林さんに話を伺いました。

陸上競技との出会いは

小学校時代から走ることが好きで、マラソン大会は毎年1位でした。6年生の時、シドニー五輪で高橋尚子選手が金メダルを取ったのを見て、「オリンピック選手になること」を夢見るようになりました。陸上はしんどいけれど、やればやるほど記録が伸び、数字として結果が出るので、算数好きの私は虜になりました。陸上競技は個人の競技ですが、高校時代の駅伝では、「だれかのために走る」という人とのつながりや絆を感じることができました。とても貴重な思い出です。

北京五輪出場の思い出は

五輪は「これ以上はない」という大

きな大会ですから、「楽しもう」という気持ちで強く、プレッシャーを感じずに走ることができました。ただ、わずか0.7秒の差で決勝に進めなかったときは悔しくて、自分の詰めの甘さを感じました。五輪に出場するトップ選手は、とても気さくで、考え方が広くて柔らかく、人として優れた人ばかりでした。「夢と目標に向かう人はカッコいい。輝いている」と感動しました。

引退、結婚、出産のそれぞれの場面で の悩みはどのように乗り越えたのか

引退の時、周囲の心配は大きかったです。自分の中で走れる喜びを感じてからやめたので悩みはありませんでした。結婚、出産のときも、両親や義父母から「仕事はセーブしなくていい。子どもはみんな育てればいい。愛が大事だよ」と後押ししてもらい、迷うことなく自分のやりたいことに取り組みことができました。イベントやマラソン大会でもみなさんに声をかけてもらい、人とのつながりで輝ける場所を見つけれられたと思っています。

少年院「播磨学園」での学習指導について

きっかけは、播磨学園の陸上教室の講師を務めたことでした。計算指導のできる先生を探していると聞き、自ら手を挙げました。数学を通して、「やればできる」「わからない

と言える「逃げない」という陸上で私が学んだことを彼らに伝えたい、夢と目標を持ち、自分の気持ちや考えを自分の言葉で発信する力をつけてほしいと思い指導しています。播磨学園での活動は、やりがいを感じています。

子育てと仕事の両立の秘訣は

がんばりすぎないことです。毎月のスケジュールを見て、走る時間、家族との時間、自分の時間を作るようにしています。家族がよき理解者として支えてくれるので、困ったときにはSOSも素直に出せます。「出産してよかった」と思いながら仕事を続けられています。

今後の抱負について

2020年の東京五輪には何かの形で携わりたいですし、陸上以外の可能性も見つきたいです。そして、また子どもも産みたいです。

私は兵庫県が大好きです。いつも私に声をかけてくださる兵庫の人が大好きです。そんなあなたかいい人が多い兵庫県ですから、人と人がつながり、みんなで支え合う社会になってほしいと思います。私の活動が、子どもを応援する社会、ママさんたちに理解のある社会につながっていくばと思っています。



Profile

1988(昭和63)年小野市生まれ。須磨学園高等学校在学中に1500mで日本新記録を樹立。2008(平成20)年北京五輪、2009(平成21)年世界選手権に5000m代表選手として出場。2015(平成27)年引退後は、ゲストランナー、ランニング教室、講演会等、幅広く活動中。

“卒業”したい、女性への依存を前提にした 男女平等社会—世代を超えた参画理念の共有を

一般財団法人女性労働協会 会長

鹿嶋 敬さん

講演会は「シニアばかり」

1999(平成11)年生まれの男女共同参画社会基本法は、今年二十歳。“成人”にふさわしい力を発揮しているかとなると、簡単にはイースと答えられない悩ましさがあります。先日、都内で講演した折り、終了後に参加者数人から、「講演を聞きに来て人はシニアばかり。これでいいのでしょうか」と言われました。確かに二、三十歳の若い人は、ほとんどいませんでした。

男女共同参画の理念は、世代を超えて共有しなければなりません。それが未完の状態であることは、2015(平成27)年の第4次男女共同参画基本計画の策定時にも感じたことです。だからこそ同計画の「第一部 基本的な方針」は、「世代を超えた理解」の下で、男女共同参画の取組みを行う必要があることを指摘しているわけです。

新鮮な目で男女共同参画と向き合う必要性

若い世代が男女共同参画に無関心なのは、多忙ということもあるのかもしれませんが、「男と女は、そもそも平等なんじゃない？」などという甘い認識があるのかもしれない。

中高年世代は女子差別撤廃条約の批准やら男女雇用機会均等法の制定、施行等、両者の不平等な関係の是正の歴史をメディア等を通じて見聞しているので、それが簡単に“ゲット”できる代物ではないことを知っています(みんながみんなとは言いませんが)。



では、若い世代の男女は本当に「そもそも平等」で、二十歳になった男女共同参画などには関心を払わなくてもいいのでしょうか。そんなことはありません。男女共同参画の理念に関心を寄せ、その上で現状を新鮮な目で見てほしいと思います。

例えば正社員全体の8割、出世コースにつながる総合職全体の8割強は男性です。女性の活躍推進が喧伝される時代とはいえ、出世コースはほぼ男性の寡占状態。「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担意識も強く、その結果が特に既婚男女の場合、男性は正社員、女性はパートや派遣などの非正社員という形で表れています。

日本型男女平等からの脱却を

このように、女性への依存を前提にした働き方を、かつて私は「日本型の男女平等」と命名しました。



是正するには男性の家事、育児参画が必要ですし、そのためには定時に帰宅できるような働き方も欠かせません。老若男女を問わず、男女共同参画への理解を深めることも大切です。これが新聞記者時代、大学教員時代、そして現在と、長い間男女平等関連のテーマにかかわってきた私の、今、社会に送りたいメッセージです。

Profile

日本経済新聞編集委員兼論説委員、実践女子大学教授等を経て、2015(平成27)年から現職。政府の男女共同参画会議議員、第4次男女共同参画基本計画・計画策定専門調査会会長等も務めた。新刊『なぜ働き続けられない? 社会と自分の力学』(岩波新書)では、女性依存型の男女平等、女性活躍推進の現状を厳しく指摘した。

女性の人権を守る DV防止に向けて

聖泉大学人間学部 教授

高橋 啓子 さん



DV問題の現状と課題

2001(平成13)年に「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」が公布され、私が「被害者面接調査」を始めた2004(平成16)年からすでに15年が経過しています。2014(平成26)年には法改正され、多様化する実情にあわせて制度改正も重ねられています。

○変わったこと

DV(ドメスティック・バイオレンス)という言葉が認知されるようになったこと、親から「女は夫に殴られても子のために辛抱するもの」と言われなくなってきたこと、またDV支援がネットワーク化されてきたことなどを実感します。ただ、現場のメンタルサポートが十分でない場合、相談員には凄まじい被害力の告白を傾聴することによる二次被害が懸念されます。「聴いている担当者を傷つけるの

で、相談する自分を責めてしまう」という被害者の声もあります。また、潜在的に男性の被害者もおり、男女を問わず、一層、被害者支援の施策への議論が必要です。

○変わらないこと

内閣府も、どこにも相談していない人が半数以上あること、また、一時保護所の利用が進んでいないことなどを課題としており、被害の実情はあまり変化していません。最も安心なはずの家庭で、日常に繰り返される心身の苦痛や後遺症が残る傷、親のDVを見て育つ子どもへの影響など、言葉に尽くせないものがあります。

まずは知ろうとすることから

DVは心身を支配します。被害者本人も気づかないうちに、尊厳や誇りを失わせていきます。周りは「離婚して自立すればいい」と言います

Profile

臨床心理士。2007(平成19)年から現職。聖泉大学副学長、人間学部長、カウンセリングセンター長を兼任。地域支援としてのカウンセリング活用を研究。滋賀県男女共同参画センタースーパーバイザーを務め、滋賀県におけるDV被害者面接調査を継続している。論文に「滋賀県におけるDV被害者調査研究」、著書に「実践カウンセリング・ノート」(ふくろう出版)など。

が、被害者は周囲から巧妙に遮断され、孤立し、DVを恥ずかしいこととして抱え込み、相手を怒らせないようにと暮らしています。被害者自身がこのプレッシャーから子どもを虐待してしまうこともあります。DVを子どもに見せることも虐待です。また、若者のデートDVも増加しており、若年層への啓発も必要です。シエルトーに保護されてから離婚までも大変なエネルギーが必要であり、離婚後の道のりも決して平坦ではありません。

「体の傷は癒えても心の傷はなかなか回復しませんが、それよりも、物心つく頃から暴力を振るう親の姿や悲鳴、ケガをした私の悲しい顔を見て育ってきた子どものことが心配です」という母親の言葉が思い出されます。どんな人も被害者になり得ます。今後も社会全体での、他人事ではない注視と支援が重要です。

配偶者からの暴力に関する相談について (兵庫県女性家庭センター)

女性家庭センターでは、「配偶者暴力相談支援センター」として配偶者からの暴力に関する相談を受けています。自分だけの力ではどうしても解決の糸口が見出せなかつたり、誰に相談して良いかわからないときなど、ひとりで悩まずに気軽にお電話ください。

●例えば、こんなとき...

- 配偶者からの暴力で悩んでいる
- 暴力を振るう配偶者から離れて、生活を見つめ直したい
- 配偶者からの暴力を見ている子どもへの影響が心配
- 結婚、離婚、男女関係で悩んでいる
- 家庭内の不和やいざこざで悩んでいる
- 「DV防止法」について知りたい
- 保護命令の申し立てをしたい

まずはお電話でご相談ください。匿名での相談に応じます。無料相談。秘密は厳守いたします。

電話相談受付時間

毎日9時から21時まで

(土日・祝日も行っています)

TEL 078(732)7700

ママの働き方進化論

**NPO法人
ママの働き方応援隊(神戸市)**

NPO法人 ママの働き方応援隊 本部
「マゴワヤサシイキッチン ここから」
神戸市長田区庄田町3丁目5-10
<http://www.mamahata.net>



人とのつながりがやりがいだと話す理事長の合田三奈子さん



子育て中の母親らで作るNPO法人「ママの働き方応援隊」。子連れで、できる範囲で無理なく働くという新しい働き方に取り組んでいます。理事長の合田三奈子さんに話を伺いました。

ママの力で社会を変えたい

NPO法人「ママの働き方応援隊」は、母親(ママ講師)が乳幼児を連れて学校や高齢者施設、企業を訪れる「赤ちゃんプロジェクト」を全国的に展開しています。現在、ママ講師は2589人、登録乳幼児は2941人が活動しています。(平成31年4月20日現在)

日本では、女性が出産を機に「仕事か育児か」の選択を迫られることが多く、働き続けたい母親の活躍の場が狭まっています。そこで、同法人は、子育て中がメリットになる働き方を創るというミッションを掲げ、子どもがいなくてできない仕事をあえて作ろうということと、2012(平成24)年に赤ちゃん先生プロジェクトが誕生しました。

同法人の活動理念は「日本の無縁社会を解消すること」。赤ちゃんは人と人をつなぐ力を持っています。その力を母親が最大限に引き出すことによって、母親を含めて赤ちゃん

を取り巻く人々が、赤ちゃんを通して話し、自分自身を振り返り、周囲とのかかわりを考えるきっかけにすることをめざしています。合田さんは、「子育て中は地域や社会の問題に気がやすく、その問題を社会起業家という視点からチャンスに変えて解決していきたい。人と人とのつながりで社会を変えていきたい」と話します。

子育て中がメリットになる!

男性の育児参加が話題になってはいますが、母親が育児をすること、家事をすることは当たり前と思われており、また育児孤立などの問題もあることから、女性にとっても子育てがデメリットに感じられがちです。しかし、「赤ちゃん先生プロジェクト」では、参加者から「ありがとう」と言われ、「産んでよかった」「もっと役に立ちたい」と満足感や充実感を味わうことができ、子どもがいることのすばらしさやメリットに気付くことができます。

活動するママ講師からは「子どもと一緒に家から一歩踏み出し、世界が広がった」「子連れで活動する選択肢が増える」「家族、パートナーとの会話が弾む」という声が聞かれます。

子連れで働くことには、周囲の理解が必要です。母親の表情が生き生きと変化することで、家族や周囲の理解も生まれます。

ママたちが自分らしく働くために

合田さん自身、同法人の活動に携わってから4人目のお子さんを出産し、子育て中に仲間といるいろいろな経験をしたことで視野が広がり、自分に自信が持てるようになったそうです。今後は、もう一人子どもが欲しいと思っている経産婦さんを支える取り組みも含め、子育て中の母親にできない仕事で母親の活躍の場を広げ、生き生きと働ける社会、また、母親と地域社会、人と人をつなぐ世代を超えたコミュニティをめざして活動を続けます。

私の赤ちゃんは先生です

著者/野津 隆志 発行所/学術研究出版



※本書は、NPO法人「ママの働き方応援隊」が実践している「赤ちゃん先生」について現場密着取材した記録です。赤ちゃん先生の取り組みの教育的意義や、赤ちゃんとともに活動する母親たちの生き生きとした姿を伝えています。

きずな TOPIC

ハンセン病元患者 の人権

生きることのもうひとつの意味

小説「あん」に込めた思い

深夜放送のパーソナリティ

をしていた頃、「社会の役に
立たなければ生きてい

味がない」と言い切った中高生たちを前にして、素直には頷けない何かが残りました。頭に浮かんだのは、「らい予防法」のために、病気が治っても療養所から出ることができなかったハンセン病の元患者のみなさんでした。この人たちに向けて、社会の役に立つとか、立たないとかいうことを、人生の価値を測る定規としてあてがうことはできないと思いました。生まれ育った環境やそれぞれの運命によって、だれもが違う人生を歩む、どんな人生であってもこの世に生きることを肯定できるような、普遍的な「生きる意味」を書きたいと思いました。

生きることの意味

小説「あん」では、ハンセン病の元患者の人生を物語の柱にしつつも、この人たちはこんなひどい思いをしたのですと訴えたいわけではありませんでした。むしろ、絶え間ない逆境のなかにあっても、人間であることのもっともベーシックな能力「感受する心」を旺盛にすることによって、この世をあらためて捉え直すことができた一人の女性の「生きた哲学の開花」

作家・歌手 **ドリアン助川**さん

こそを最終的なテーマにしました。

小説「あん」が13言語に翻訳され、民族や宗教を超えて世界中の人たちに読まれる作品になり得たのは、ハンセン病を書いたからでも、ほとんどの国の人たちにとって意味不明な「どら焼き」を物語の小道具に使ったからでもありません。いつの時代も、どんな民族も、生きるこの意味は最大のテーマなのです。それについて、この作品がわずかながらでも新しい切り口を見せたからだと思います。

共に生きるために大切なこと

私は、逆境のなか、命を絶たず生きてこられたみなさんに対し、最初から尊敬の念しかありません。その思いがあったからこそ、療養所のなかに入っていたのです。今もその気持ちに変わりはありません。

ハンセン病問題に触れて、ハンセン病のことしか考えられないのであれば、視野が狭いと云わざるを得ません。本当の問題は、ハンセン病患者を社会から排除しようとした構造がこの国にはいまだ根強く残っていることです。福島第一原子力発電所事故による避難者の問題や今でも残る部落差別、一部の外国人へのヘイトスピーチなど、根を同じくした問題が目の前にあります。現象ではなく、構造を見なければいけないと強く思います。



Profile

1962(昭和37)年東京生まれ。早稲田大学第一文学部卒。日本ペンクラブ理事。長野パラリンピック大会歌『旅立ちの時』作詞者。小説『あん』は映画化され、2015(平成27)年カンヌ国際映画祭オープニングフィルムとなる。2017(平成29)年フランスの『DOMYTIS文学賞』と『読者による文庫本大賞』の二冠を得る。近著『新宿の猫』(ポプラ社)ほか著書多数。



(ポプラ社)

きずな映画館

RBG 最強の85才

このドキュメンタリーの主人公ルース・ベイダー・ギンズバーク(通称RBG)の人生は、米国における性別との戦いの歴史そのもの。

男性が圧倒的多数を占める法曹界で彼女は弁護士としてキャリアをスタートし、性別に基づく制度や法律を改める判例を積み上げていきます。カーター政権下で裁判官となり、クリントン政権下で女性として米国史上二人目の最高裁判事に任命されます。

85歳でなお現役。保守化の進む米国最高裁においてリベラルな立場を貫き、痛烈な反対意見を打ち出す姿勢が最近若者たちの目に留まり、マイノリティのアイコンとしてTシャツやマグカップが作られ、メディアがこぞってその動向を注視する一大ブームが起っています。

「最強」といっても、彼女の手柄は控えて物静か。差別する側の人間は、そこに差別があるなどと気づいていない。そんな相手と戦うには「怒るの」は時間の無駄」と、粘り強く論理的に主張する姿は多くの示唆を含んでいます。



© Cable News Network. All rights reserved.

監督:ベッツィ・ウェスト
ジュリー・コーエン
2018年アメリカ映画、98分
6月21日からシネマール神戸で公開
お問い合わせは、078(334)2126

「のじぎく文芸賞」作品募集中 ～あなたの思いを作品に書いてみませんか～

- 募集部門** 小説・随想・詩・創作童話
- 応募条件** 兵庫県内に在住、在勤、在学の方
- 応募作品** インターネット上を含む未発表・未投稿の自作の作品
 ■詳細については、協会ホームページをご覧ください。
 お電話(下記参照)でお尋ねください。



- 応募方法** 郵送で受け付け
- 募集期間** 6月3日(月)～9月9日(月)(消印有効)
 〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15 県立のじぎく会館内
 (公財)兵庫県人権啓発協会「のじぎく文芸賞」係

EVENT GUIDE イベントガイド



※その他のイベント情報は、当協会ホームページ「研修会・イベント情報」をご覧ください。

- イベント名** 加古川市 人権学習専門講座
- 日時** 第1回 6月15日(土)10:00～12:00
 第2回 6月22日(土)10:00～12:00
- 場所** 加古川市人権文化センター大ホール
 ※山陽電鉄「尾上の松」駅下車徒歩約16分 ※神姫バス「南備後」下車徒歩約5分
- 内容** 演題: 子どもの人権
 第1回 6月15日
 「人権教育の理念を活かした集団づくり」
 講師: 土田 光子さん(大阪多様性教育ネットワーク)
 第2回 6月22日
 「子どもたちの未来のために私たちにできること」
 講師: 島田 妙子さん
 (一般財団法人児童虐待防止機構オレンジCAPO(カポ)理事長)
- 問い合わせ** 加古川市人権文化センター
 TEL 079(451)5029 FAX 079(426)0062
 ※事前申込要(市外の方は電話申し込み)・当日受付可。

ラジオ関西「谷五郎の笑って暮らそう」(毎週火曜日10:00～13:00)で、
 12:35頃から「きずな」の記事等を紹介しています。

HALF TIME



この2年、毎日電車通勤をしています。女性の運転手や車掌がどんどん増えているように思います。これまで「男性の仕事、女性の仕事」という固定的な意識が強かった職種にも女性の活躍が光ようになってきていると実感します。
 しかし一方で、DVやハラスメントなど女性が被害者になる事件も多く起きています。

性別を問わず、すべての人が自分らしさを発揮しながら安心して暮らせる社会づくりについて「きずな」を通してみなさんと一緒に考えていきたいと思っています。

※今年度、ふれあいサロン「クロスワードパズル」は、奇数月と8月に掲載します。みなさん奮ってご応募ください。

